
◆◆◆ 編 集 後 記 ◆◆◆

平成9年に臨床教育実践研究センターが発足して以来、今年度で27年目となりました。平素よりご指導、ご支援をいただいております皆様方のお力添えに、心より深く感謝申し上げます。

令和2年に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、当センター主催のリカレント教育講座・公開講座を休止せざるを得ませんでした。昨年度よりようやく開催することができました。

そこで今号では、令和4年度に開催いたしました、当センター主催の第24回リカレント教育講座のシンポジウム抄録を特集として掲載しております。第24回のテーマは「『心の教育』を考える—思春期とSNS—」でした。シンポジウムでは、学生相談と医療の現場を中心に臨床心理士としてご活躍されている2名の先生方をシンポジストに迎え、多角的な視点からお話いただきました。

また、当センターの活動報告として、公開講座抄録「社会的精神分析に向けて」を掲載しております。こちらは、令和4年9月～12月に当センター外国人客員教授としてお招きしたサイモン・フレーザー大学のロジャー・フリー先生を講師として開催した公開講座の講演内容です。講演では、エーリッヒ・フロムが発展させた社会的精神分析を取り上げながら、近年の社会的・文化的危機が人々に与える影響について話されました。また、そのように社会的・文化的な背景が人々に影響を与える以上、精神分析においても社会の機能やシステムに関する批判的な認識が必要であることが説明されました。

さらに今号では、大学院生による3本の論文を掲載いたしました。いずれもそれぞれの研究や臨床実践を通じて関心をもったテーマについて、調査研究や文献研究を行い考察されています。これらの諸論文を通じて、当センターの多様な活動の一端を感じていただければ幸甚に存じます。

当センターも設立から27年目となりますが、当初から変わらずにあるのは、心理教育相談室での活動を基礎に置き、日々の臨床実践を大切にするという姿勢であると思われます。新型コロナウイルス感染症の流行以降、人々のつながりのあり方が社会的に変わってきたようにも思われる昨今ですが、こうした社会的変化も含めて、こころのありようを見極めるべく、真摯かつ丁寧に臨床実践に取り組んでいきたいと思っております。

皆様方には、本紀要について忌憚のないご意見、ご感想をお寄せいただければ幸甚に存じます。今後とも当センターにご指導賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター編集委員会

水野 鮎子